

優しき笑を以ていふのに、

「迷惑？ 迷惑は當り前ぢやないか。貴女が私と入違ひに、鏡子の部屋へ行つて、思ふ様苛めたに相違ないの。まあ、淺ましいあんな死様をするといふのも、弓さんが無理な事を屹度言つたからさ。私や、もう弓さんを鏡子の爲に、是からは敵として見るから、その覺悟してお出でなさい。」
母上の云ふところ理よりは非に責めて、寧自暴腹の氣味なのに、弓子は持つて扱つて困じ果てたる折から、玄關より人が來て、突然に番町様の——喬三郎様御越しの趣を告來る。

「まあ、あの人は、亞米利加で死んで仕舞つたのぢやないのかね。」
と眉を顰ませて、

「死んで仕舞つちや困る人は死んで仕舞つて、死んで仕舞つても好い人が、生還つて來るんだもの、否になつて仕舞ふよ……。」

弓子の方はさてこそと胸に當たる事あつて、玄關の者には兎も角も、自分がお目に懸るからといへば、未亡人がはたと遮つて、
「私を差措いて、何を言ふのです。座敷へ通してお置きなさい。私が先へ、番町さんにはお目に懸ります。」

(九十九)

子爵未亡人は喬三郎に逢つても、まだその心の奥底が計られぬ事ゆゑ、鏡子の變死の事に就ては、秘して言はぬつもりで居たところを、彼方より切出されて、

「承れば、お邸ではお取込の御様子でございますが、飛んだ所へ伺つて御邪魔を致します。」

「何。」

と未亡人はわざと落着いて見せ、

「些細な事でございますから、その御遠慮には及びませんので。」

さう言ふ面を熟と見入る喬三郎の、

「は、あ、些細な事ですか？果して些細な事であれば、別に懸念する事もございませぬけれども。」

一旦語を切つたが、また、

「玄關の方に伺ひますれば、どうか、お邸に御不幸があつたやうに承はりました。誰方て入らつしやいます。」

愕然としたる未亡人は言葉もないのに、

「今伺へば、弓子様は彌々御機嫌が能いやうて、大慶です。お妹御の鏡子様は、その後お變りもございませぬかな？」

「は、……。」

とは答へたが、さすが空々しく、變りなしとも言ひ兼ねて、

「玄關の者にお聞及びてございましたら、申上げないのも何てございませぬけれども、實はあの、鏡子が急にあの、病氣になりました……いけなくなりましたものでございます。」

「鏡子さんが、急病で？」

とさも驚いた様に眼を見張つたが、そのまゝ深く眉を擡めて、

「はて、どのやうな御急病でか知らんが……昨日お目に懸つた時は、彌々御壯健で居られたものを。」

喬三郎が鏡子に、昨日逢つたと聞いて却つて怪しむ未亡人。

「あの、鏡に貴方は、昨日お逢ひてございましたので？」

「はい。お目に懸りました。濱町の人相見の門で圖らずお目に懸りました。」

そのまゝ私の居る假の住居へお連れ申して、一晩お泊め申したのです。」
さてはその故の外泊かと分つても、解しがたきは鏡子が自殺の原因で。

「それはまあ、御厄介でございましたつけ。」
と一先づそれだけの禮の言葉を陳ねた後、

「實はあの、急病と申しても、何でございませぬ——全くは自害を致したので
ございませぬが、もしや貴方にお目に懸りました時、鏡子はどのやうな事を、
申して居りましたとございませうか。」

「はあ。」

と喬三郎は静に葉巻を取出して、

「いや、邸の事に就て、いろいろお話してございました。殊に現在に相續問
題が起つて居るので、母は頻に自分を立てたい様に言つて居るが、姉への義
理として、到底さういふ事は出来ない。萬一さういふ結果になるならば、自

分は死んで仕舞ふと仰つてゝしたよ。」

「死んで仕舞ふと申して居りましたか。」
と言葉を挟む。

「はい。で、一應は鏡子様を慰めはしましたけれども、この邸の相續問題に
就ては、無論私にも聊か説がございませぬので、お取込を承知いたして、斯様
に突然伺つたのでございました。」

(百)

「御説があたりてと仰るのは、どういふ事でございませぬか。」
喬三郎はわざとゆるやかな調子で、

「いや、説といふほどの事でもありませんが、鏡子様が今御逝去になつたと

いふ事があるけれども、私は島尾様などと同説で、よし御存生であつても、鏡子様を相續者に立てる事は、不服でありました。當然藤門家の後繼者たるべき人は、唯一人弓子様あるのみでございますから。」

さつぱり言つて、まづ未亡人の荒膽を挫ぎ、

「いや、また、一方に弓子様に多少の理想のある所、將來に目的のある所、それも私聊知つて居る事でもありますが、それはまだ然るべき機會が来ないのであるからして、今弓子様自身その理想を實現する事は、能はない事なのです。」

私は今、鏡子さんが、どういふ原因で御自殺されたのか、それは強ひて問ひません。しかし存生して居られて、徒に貴女に由ない御苦勞を掛けるばかりか、弓子様へ對する義理をも缺くやうになつては、天理にも戻る次第であるから、お可愛想の様であるけれども、それを覺悟しての鏡子さんが御自殺は

ある意味でいふ自他の幸ひであらうと思ひます。

此上は貴女に於ても、この邸の相續者に就ては、弓子様をこそお立てになるやうに、鏡子さんの御靈前で、お誓ひになるならば、鏡子様の靈も慰められる事であらうし、また弓子様としてもその身が固まる事であるので、その近い將來に子爵新夫人となつた曉、さて大にその理想とする所を、實現されやうと努めた所で、恐らく時が遅いのもあるまいと思ひますから、貴方も鏡子さんの御不幸に因つて、さすがにお心も亂れてお居て、あらうとは、御察しして居りますが、この際、小感情はお止めになつて、一度藤門家に嫁してお居てになつた以上には、終始子爵家の爲を思ふべきは當然でありますから、弓子様を彌々實のお子として御愛撫なさると共に、藤門家の真正の相續者として、彼の方を御待遇なさるやうに、私から願ふのであります。」

未亡人は默然としてある眼には、涙を溢らして、なほ思ひ惑ふかの氣色も見

えだが、さすがに良心のひらめく所があつて、遂に、
 「番町様の折角のお言葉もごさいますし、かたぐ、向後の弓子に就ては、
 何分宜しく、お願い申しますてごさいます。」

さもあれ、弓子が彼大目的を近き將來に達する事は出来なくなつたもの、
 後に隠れて居たる小父上の、此所に公に現はれ來ては、藤門家の爲にも、我
 が爲にも、決して悪しきやうには取計らふまじと思ふものから、何事も機會
 の到るを待つて、事の成功を期すべきこと、敏くも臍を固めたので。

なほ喬三郎の俠氣は、粹を通す事にまで及んで、茲に逸早くも、弓子が良人
 とし、藤門子爵の式服を着すべき人を迎へる事にも立到る。抑もそれは何人
 であるか、先様御推もじの上なれば、今取立て、は言はずもがな。

若き質朴なる毬栗頭の子爵が、苦心經營に成る一大戯曲は、美しく大膽なる
 子爵夫人が女優として、近く我國の劇壇に現はると共に、けやけき異彩を

放つものであらう。

女 優 終

大正二年十一月十六日印刷
大正二年十一月十九日發行

(女 優)
(實價金八十五錢)

著 者 山 岸 宗

東京市日本橋區通四丁目五番地

發 行 者 和 田 靜 子

東京市京橋區西紺屋町廿七番地

印 刷 者 石 川 金 太 郎

東京市京橋區西紺屋町廿七番地

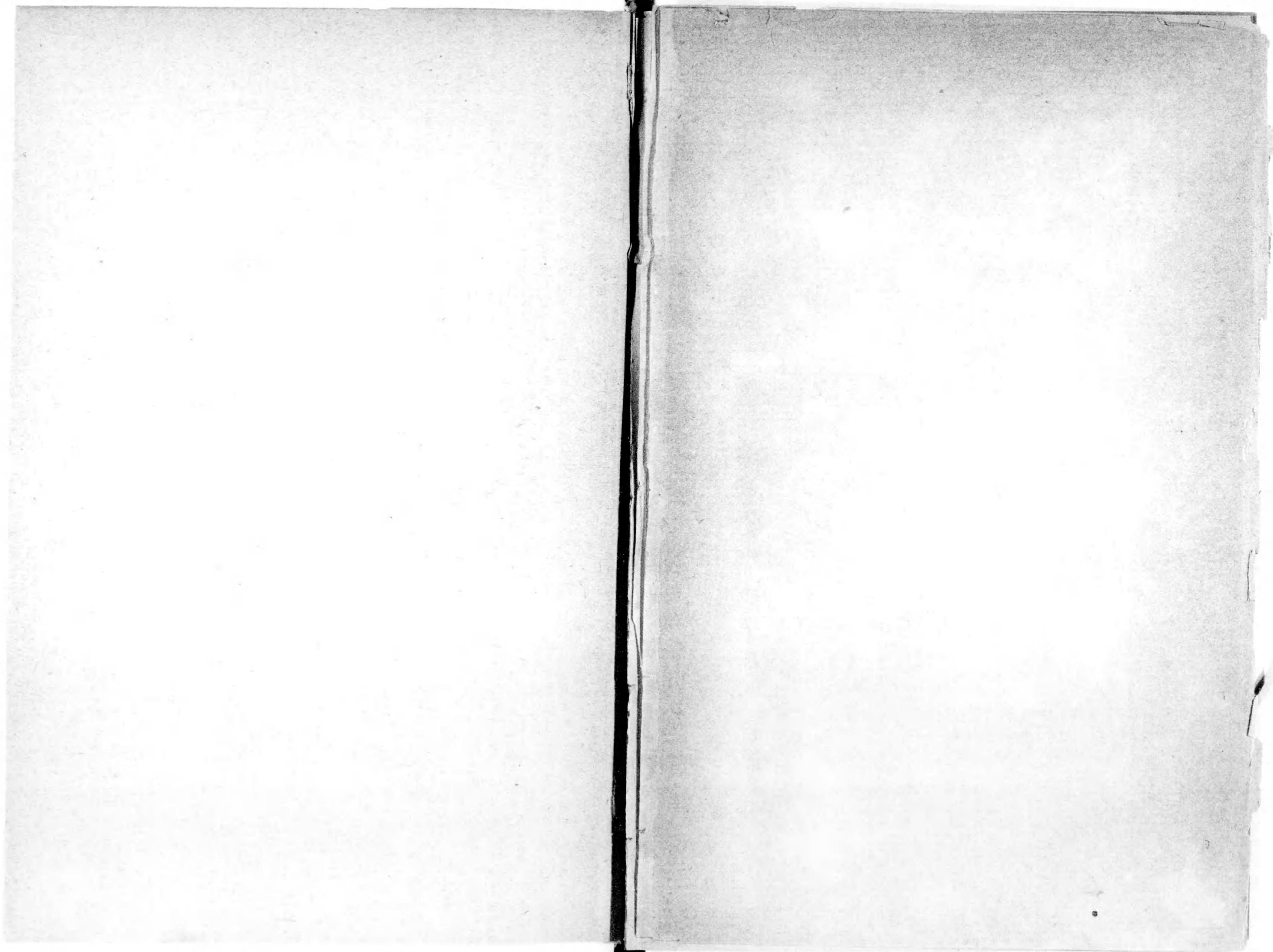
印 刷 所 株 式 會 社 秀 英 舍



發 行 所

東京市日本橋區通四丁目五番地
(電話本局五六一番)
(振替口座東京一六一七)

春 陽 堂



272
300

終

